## 剧業のとき

#### 先代社長の夢

益田市の名家である材木問屋の四男として生まれた。幼 たものであった。 眼下にした益田の町並みを望み、強く抱いた大志を重ね 感性を育んだ郷里への熱いノスタルジーと、七尾城から 会社を興した際、七尾を社名としたのも、 山にある七尾城跡。後に、青雲の志を抱き北九州の地で 少期を過ごした益田市で、 創業者の原田高男(昭和4年~平成11年)は、 特に慣れ親しんだのが、 創業者独特の 島根県 七尾

菓子作りの修行を重ねた。 多くの人に美味しいお菓子を届けたい」、この一念でお 唯一の贅沢品であり、 もない昭和25年の頃。 た益田市を後に、お菓子作りが盛んだった小倉 北九州市)へ単身腕試しのため移り住んだのは、戦後間 独立心が強い初代社長が20代で一念発起し、 嗜好品であった時代に「一人でも 食料難が未だ残り、 お菓子は庶民 住み慣れ (福岡県

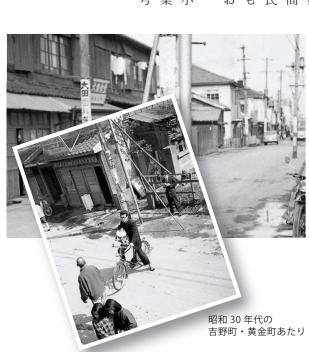
地は十三間道路(国道3号線が十三間道路と呼ばれ10号 倉北区)に、「七尾製菓」の看板を上げる。当時、 27歳となった昭和31年に独立し、 小倉市吉野町 (現小 創業



長女を抱く初代社長 (創業当時)

線の基点でも有った)に面した中島小学校の裏通りにあ という。この姿を目の当たりにした初代社長は、 感溢れるお菓子作りの開発・製造に、夢と情熱を注ぎ込 子供たちに喜んで食べてもらえる、美味しくボリューム 必ず足を止め、しばらく羨望の眼差しで覗き込んでいた い香りが立ち込めていた。近所の子供たちは工場の前で あたりは大変賑わい、 汗にまみれて尽力したのであった。 日々せんべいを焼き上げる甘 沢山の





昭和21年頃の紫川岸

# 兵技ありがとうごさいました

昭和25年頃の魚町商店街

### 明のとき

在しており、せんべい屋としては46番目の後発メーカー 手練りせんべいを細々と生産するメーカーのひとつだっ 力でせんべいを焼くため品質の均一化に一苦労してい 単位でせんべいを作り、無煙炭(煙の出ない石炭)の火 としてのスター 七尾製菓も同様に、機械を使用せず手で生地を練る、 北九州には既に45社ほどのせんべい屋が存 トだった。当時、どのせんべい屋も家族

えられ、 どの問題にも直面した。こうした時代変遷に対応できな された。また、エネルギー変革に伴う火力源の見直しな 富に流通していたこと。次に、戦前から火力エネルギー の拡大を目的とした大掛かりな機械化の導入を余儀なく の中心を担っていた石炭が、地元筑豊炭鉱の好景気に支 存在したことで、他の都市部よりもせんべいの原料が豊 世界的な貿易港であった門司港が、商業地の小倉に近く 屋が多く存在した理由として、まず戦後の食料難のおり、 いメーカーは、自然淘汰されたのは言うまでもない。 大量消費という時代の訪れにより、各メーカーは生産性 屋、が80軒以上存在していた。当時の小倉にせんべい 昭和20年後半 しかし、その後、国内の景気回復による大量生産、 比較的安価に供給されていたことなどが挙げら ~30年代の小倉には、最盛期で "せんべ









社員一同で工場を増設している様子



た。大半は地元を中心市場としたメーカーとしてと存続

現在、小倉にあるせんべい屋は数軒を残すのみとなっ

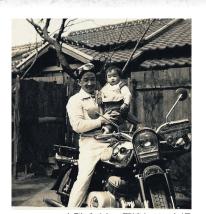
昭和30年頃の門司港

近所の子どもも度々遊びに来ていた

他店が商売範囲としていない、商圏外である長距離間の 炭鉱夫などへ直接販売。その場で回収した現金は、 好景気に支えられ、現金取引での商売が盛んに行われて 商品配送に取り組んだ。その配送手段として小型バイク らない独自の販路確保に努める必要があった。そのため、 創業場所が比較的先発メーカーと近隣していたことな に明日の原料購入に当てられた。 いた。バイクに積載可能な1斗缶へせんべいを詰め込み、 創業当時、 特に足繁く出向いていた筑豊方面は、 せんべいの製造・販売において、 単独でバイクを駆使して商品販売を行ってい せんべい屋としては後発参入だったこと、 他店に迷惑が掛か 炭鉱の 直ぐ

立たない危機に直面する事もあった。 る日々が続く。独自の新規販路での取引ゆえ、時には納 人先の計画倒産に掛かってしまい、明日の生活の目処も 早朝からせんべいを焼き上げ、 小さなバイクで長距離間を駆けて商品販売す 朝から晩まで道路事情

に変化していった。 した。その燃料は無煙炭からガスへと、 た。また、品質均一化のため、 様々な苦労と挫折を重ねながらも、 生産量を増やすため、少しずつ機械化を進め 火力エネルギー源も見直 その時に得た蓄え 機械の変遷と共



小型バイクで配達していた頃

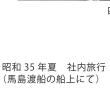


昭和 29 年頃の小倉駅建設予定地

三輪トラック導入の頃



四輪トラック導入の頃





番先にプロパンガスを導入し、せんべいの製造にあたっ 力を得ることが出来るプロパンガスへの切り替えであ 能となった。 かなり高価ではあったが、先見の目をもって北九州で一 を得ることが難しかった。そこで、都市ガスと比較して 市ガスでは朝夕の食事時に火力圧が落ち、安定的な火力 当社の転換期において特筆すべきは、 今までと異なる本格的な機械による大量生産が可 著しく生産性が向上。効率の悪い手焼き生産 都市ガスへの切り替えも視野に入れたが 安定的に強い火

### 飛躍のとき

えていた若松と、対岸の戸畑を結ぶ橋を建設。当時は東 消費者の嗜好も西洋風に変化する中、 の製造を開始。国内の生活スタイルが徐々に西洋化し、 するほか、当社の飛躍の始点となった「フレンチパピロ」 た当社だけが、生産を手掛けることが出来た。その結果 溥焼きせんべいにふんわり甘いクリー いち早く本格的な機械化を図り、大量生産が可能となっ れた他店が、その発注数量の規模から軒並み辞退した中 ハピロは、 躍当社の名前が北九州一円を席巻することとなった。 昭和37年、 時同じ頃、「生姜せんべい」等の和風せんべいを生産 子どものお菓子として画期的な商品となった。 当時としてお洒落な洋風菓子ながら手頃な価 の開通を記念した「若戸博覧祭」 (当時、 お土産せんべいの生産を依頼さ 石炭積み出し港として栄 「クルッと巻いた ムを流し込んだ」

こととなった。ことの意味があることのようないできない、「フレンチパピロ」は爆発的にヒットを記録。これい、「フレンチパピロ」は爆発的にヒットを記録。これルを使用し大々的に販売を試みた。この宣伝効果も手伝

ステラ等の半生菓子の製造・販売を始める。和57年からは「ゼリー」、平成元年からはドーナツ、カ鼓せんべい」等の小麦粉せんべいを続々と発売。又、昭鼓やんべい」等の小麦粉せんべいを続々と発売。又、昭

まるお菓子づくり」をさらに前進させている。そして今、「頑固なまでの職人気質が生み出す、心場





吉野町社屋と初代社長



宇佐町当時の社屋





現在の本社工場





た

しり

ついて話された。 当時を振り返り、よく初代社長は「運」という言葉に

た思いを一言に凝縮した「質実剛健」、初代社長が一番 を貫いた時、おのずと運と結果がついてくる』 そうし それは違う。運は常に引き寄せるもの。 好きだった言葉である。 『運と聞けば、他力本願的な言葉だと思われがちだが、 情熱を持ち信念

決して派手ではなく、地道に一つの事に従事し、どんな 障がいがあっても信念を持って貫く」そういう意味の言 **一飾り気がなく真面目で、強くしっかりしていること。** 

の道、の人なのです」と胸を張って生きること。 となく「いいえ、私は゛これ゛なのです」、「自分は゛こ たった一度の人生だからこそ、時代の風潮に流されるこ ら…」という風に『自分』を主体としない生き方ではなく、 「みんながやっているから…」とか、「まわりが言うか

なるのである。 事にも屈しない強い心」や「自分自身への誇り」のよう なものが生まれ、自らを叱咤激励してくれる本当の力に つまり、「自分の正道」を知り、探していくうちに「何

と、 ならないものでもある。 る必要がある。しかし、決して利己主義になるのではな そのためには、日々の生活において常に合理的な思考 全てのことに対し情に厚く、且つ控えめでなければ 慣例にとらわれない大胆な発想と行動力を大切にす

これからもこの言葉をもって、 へ羽ばたいてまいります。 メーカーとして、また、地域を代表する企業として未来 そうした『屈しない心』を持って、創業した七尾製菓。 日本一の小麦粉焼菓子

代

に

残

次